

母子関係についての心理学的研究

— 動物(犬)にみられる attachment と separation について —

馬場 一雄 (日本大学医学部小児科学教室)
森 永良子 (" ")

はじめに

母子関係の重要性については、Bender, L. Bowlby, J. らのホスピタリズムの研究によって広く知られている。

乳児が、母親との接触を維持しようとする欲求、また、母親との接触を妨げられたときに、それをとりのぞくような行動を、Bowlby, J. は愛着行動(attachment)としている。

愛着行動は、生得的なものであり、二次的に獲得されたものではない、基本的な欲求である。

最近では、母親の育児に対する関心の低くさからくる、家庭児のホスピタリズム傾向や、虐待児問題など、母子関係のゆがみが社会問題となってきた。

母子関係についての実験、特に、子どもを母親から隔離した場面で生ずる行動は、児童臨床心理学の重要なテーマではあるが、現実には、実験不可能である。

母子関係から生ずる障害についての研究は、母親の死亡、病気などで、たまたま、母親から離れて保育された乳児の行動より推定する以外には、方法のない現状である。当然、母親から離れる時期、期間など、条件が一定しないのが普通である。

動物実験では、Harbow, M.F. によるアカゲザルの子の母に対する愛情の実験的研究がある。Harbow, M.F. のアカゲザルの実験は、乳児にとっては、母親の存在がいかに重要であることを示唆するものであるといえる。

動物の行動を擬人化し、拡大解釈することについては論議も多い。しかし、動物実験では、人間では不可能な、母子の隔離も可能である。

哺乳動物の行動は、人の子どもの示す行動と共通性を示すものがあり、動物としての、人間の行動を原点にもどり、検討したいと考える。

経 過

実験動物としての犬は、主として、外科領域で実験されていたが、最近では、長期子後が一つの目的となり、犬の精神衛生も問題となってきた。

犬は、常時15~20匹が、各ケージに隔離されていたが、実験室に隣接した土地に運動場をつくり、日中は戸外に出すようにした。

犬は、戸外に出るようになると、自然に群を形成し、優位性、順位争いなどがあり、ボスを中心に群として行動をするようになってきた。群で行動するようになった犬は、攻撃性、常同行動、などが消失し、なき方も静かになり、人に対して従属的になってきた。

その後、ケージ内の柵を取り、自由に往来出来るようにしたので、ケージ内でも、群で生活するようになってきた。

グループで行動するようになった犬の妊娠・出産があり、群の中での犬の生活が定着してきた。

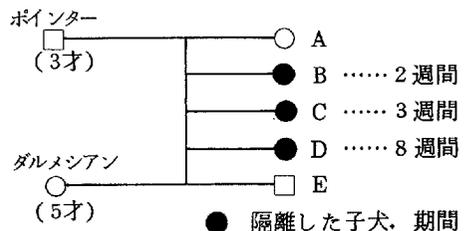
実験目的

- ① 出産直後からの母犬の養育態度の観察
- ② 母犬から隔離した子犬の attachment.
- ③ 隔離した子犬と、コントロールのその後の群の中での適応状態の観察

実験方法

a) 対象

54年12月出生の母犬と子犬5匹



一方法一

① 生存した5匹中3匹を母犬から隔離する(生後3週間を、離乳可能な時期とした)。

2匹は(A, E.)は、母犬と同ケージ内で生活させる。

3匹は(B, C, D)は、それぞれ、2週間、3週間、8週間と、母犬から離し、人が飼育する。

② 隔離期間を経て、母犬の許にもどす。母犬のA, B, C, D, Eの子犬に対する態度の差、ならびに、子犬の母犬に対する態度の観察。

③ 他の犬のA, B, C, D, E,の子犬に対する反応の観察。

結 果

① 出産直後は、母犬は、排泄と、水を飲む以外は、子犬を体内に抱え込む姿勢で保護していた。圧死させた子犬をくわえて体内で暖めるという動作を繰り返す。

2～3日後には、前肢をたててすわる姿勢となり、子犬に乳房をふくませるようになる。飼育者以外の人に対しては、ドアをあけると激しく吠える。

3日以後は、自由に入出入り出来るケージから排泄、徘徊など、外に出る機会が多くなり、他の犬に威嚇するように吠えだす。特に、他の犬が、ケージに近づくと吠え方が激しくなる。

5日後には、子犬に関心を示す雑種を追い立て組み伏せるなど、防衛的な態度を示す。

10日目頃より、乳房を吸う子犬を払うような態度を示す。離乳準備のために、ミルクを入れた小鉢をケージ内の子犬にあたえると、母犬が子犬よりさきに飲んでしまう。側によってくる子犬にうなって威嚇するなど、今迄みせてきた、子犬を

保護する態度とは、まったく逆の行動を示す。子犬を威嚇する行動は、その後、ミルクや食物をあてようとする時にみられるようになった。

子犬は、母犬が終るまで、待つ態度を示す。3週間目には、餌で、子犬をかむ行動を示した。

② 3週間目に、B, C, Dを親犬から離したが、隔離後、親許にもどすと、子犬は、B, C, Dとも、母犬よりも、飼育者に依存した。飼育者に対するattachmentは、B, C, D, 隔離された期間とは、あまり関係がないと考えられた。

母犬は、A, Eには、次の出産まで、保護、愛撫など、特別の関係をもったが、B, C, DにはA, Eに示すような態度はみられなかった。

③ A, Eは、母犬と共に群の中で行動するようになったが、C, Dは、群をこわがり、拒否し、他のケージに隔離しないと餌も食べられない状態がつづき、1年3ヶ月たった現在も、群の中での行動は困難がある。

Bは、群の中に入ることは出来たが、母犬の保護がないために、他の犬の攻撃目標となり、5ヶ月の時に噛まれた傷が化膿し、広範囲の腫瘍のため全治6カ月を要した。現在は、C, Dに比較すると適応もよい。

考 察

犬の母子関係、特に、母犬の子犬に対する養育態度の変化と、3週後に母犬から隔離された子犬のattachment行動および、その後の群への適応について観察をおこなった。

今後の実験では、出来るだけ早期の隔離をおこない、隔離の時期による、母子の行動の変化について検討を試みたい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

母子関係の重要性については、Bender, L・Bowlby, J.らのホスピタリズムの研究によって広く知られている。

乳児が、母親との接触を維持しようとする欲求、また、母親との接触を妨げられたときに、それをとりもどそうとする行動を、Bowlby, J.は愛着行動(attachment)としている。

愛着行動は、生得的なものであり、二次的に獲得されたものではない、基本的な欲求である。最近では、母親の育児に対する関心の低くさからくる、家庭児のホスピタリズム傾向や、虐待児問題など、母子関係のゆがみが社会問題となってきた。

母子関係についての実験、特に、子どもを母親から隔離した場面で生ずる行動は、児童臨床心理学の重要なテーマではあるが、現実には、実験不可能である。

母子関係から生ずる障害についての研究は、母親の死亡、病気などで、たまたま、母親から離れて保育された乳児の行動より推定する以外には、方法のない現状である。当然、母親から離れる時期、期間など、条件が一定しないのが普通である。

動物実験では、Harbow, MF、によるアカゲザルの子の母に対する愛情の実験的な研究がある。Harbow, MF.のアカゲザルの実験は、乳児にとっては、母親の存在がいかに重要であるかを示唆するものであるといえる。

動物の行動を疑人化し、拡大解釈することについては論議も多い。しかし、動物実験では、人間では不可能な、母子の隔離も可能である。

哺乳動物の行動は、人の子どもの示す行動と共通性を示すものがあり、動物としての、人間の行動を原点にもどり、検討したいと考える。